

PLANET LIFE

http://caramelplanet.xxxxxxxx.jp/

PLANET ZERO INFORMATION PRESS 110109 in INTEX OSAKA

mailADD : ai@planetzero.halfmoon.jp

一年前の今日は、まさか自分がジャイキリでスペーススとは思ってたです。GIANT KILLINGでははじめまして。PLANET ZERO鷹村と申します。GKがアニメ化が、と情報を聞いてへーほーぶーん、とか思ってたのに。私、どうもいい原作がアニメになるとやられがち。同じことを繰り返すこと、これが3回目です。元から原作知ってたのにアニメでやられた系。最後の最後に、世良に全部持ってかれた。そりゃー、ボテテで「世良がわいい」「世良がわいい」って言ってたけど！ アニキリ・ラス前の神回で私に天使が降りて来たるな。世良を「天使、天使」言ってる割にセラサクです。かわいい子には攻めさせる。という基準で好きキャラが攻め決まるのが、もう相手との関係性、としが言いようがありません。でも、基本攻めスキー傾向かも。そもそも、世良みだいないわゆる「愛すべきばか」に堕ちたのは人生初の出来事です。基本頭のいい子が好きなのに、私。世良の分は堺さんが埋めてくれるから大丈夫！問題ない！
本当はペーパー作る予定なかったんですが、今週のモニガすこすぎたんでSSとか書いちゃいました。ネタばれはしてないでコミックス派の方もご心配なくです。ですが、紛れもなく世良が変態です。すみません。私、世良イチオシのはずなんだけども。

予兆

「ちっくしょ……」

思わず声に出た本音は、多分自分を病院に連れて行く算段をつけながら一緒に歩いてくれているスタッフには聞こえていたと思う。

だが、聞こえない振りをして何も言わないでいてくれるのが今はすごくありがたい。

背後から遠い歓声が追ってくる。ほんの数分前まであのシャワーのように声が落ちてくる場所で走り回っていたのがウソみだいだ。

「……痛っ」

「大丈夫か、世良？ 担架呼んでもいいんだぞ？」
「っす。平気っす」

徐々に足首のあたりがずきずきと疼き始めている。足は地面につけるから、骨折ではないのはわかる。

（腿も大丈夫だ。切ったら……歩けない）

昨夏のチームメイトのアクシデントを思い出して、一瞬世良は身がふるえた。あのケガのせいで、結局夏木はまだ復帰できていない。

フロサッカー選手にケガはつきものだ。特に最前線でボールを巡って敵と渡りあうのが宿命のFWにとって、ケガは日常茶飯事だと言っている。

実際、上位のチームであるほどかなり荒っぽく削ってくるのは確かだ。それに負けないタフなフィジカルを作り上げるがあるいはジーノのようにかわしまくる技術を身につけるが。

だが、それでケガはついて回る。

（けど、今日の俺は自爆だ……）

前に転がってきたボールを懸命に追いかけて「届く」と思った瞬間、酷使した脚が悲鳴をあげた。

「……骨に異常はないようだし、多分ねんざで間違いないが一応病院でレントゲンは撮るからな。着替えたら行くぞ」

「っす。迷惑かけてすみません……」

背中から大きな歓声が追ってくる。びっくりと反応してしまった。

「お、なんか騒動あったか？」

「どっちかな？ でもウチ、今季清水と相性悪いからなあ……世良、ちょっと車回してくるから。着替えてここで待っててくれ」

「っす」

ロッカールームに一人取り残されて、世良は大きくため息をついた。

スタッフたちの言う通り、多分大したケガではないのだと感覚ではわかる。

だが、

（もし……自覚症状がまだ出てないだけで、実はなんかヤバいことになってたらどうしよう？）

夏木ほどではないにしても全治一カ月以上の大けがだって、毎シーズンのようにどこかしらのチームで起きている。決して他人事ではない。

そろそろ熱を持ち出した足首がずくずくと脈動していると、あらぬ心配が頭をもたててくる。

（大丈夫だって。ただのねんざだし。絶対ケガしない選手なんがいらないんだし）

だが時期は最悪だ。

夏木がチームに戻ってきて、FWのポジション争いは苛烈になることがわがっている。

自分はいつまで、ヒッチの外にいてはいたくなくなるだろうが。

焦りを感じていたのは確かだが、思わぬことで足元にほつかり穴が開いてしまった。

サッカーは、悪い。

息をついて顔を上げる。そこは、今、世良の代わりにヒッチに立っている堺のロッカーだ。

SAKAIという文字を見て（そういえば）と、世良は思い当る。

（どういや、堺さんってあんま、ケガしないな……）

頭からシャツを被りながら、世良は思った。いつもクールで近寄るなオーラを放っている9番は、正直世良にとっては近寄りたがい存在だ。

試合中の選手たちの私服がかがっているロッカーはオープンで、ホームゲームとまでは自分の部屋のようなものだ。

ネームプレートの入ったロッカーにそれぞれの私服が試合中の主を待っている。

なんとなく、堺のロッカーの前でそのそと着替えていた。

目の前には世良などよりはよほど上背のある堺のジャケットやTシャツがきれいにかがっている。

（几帳面だよなあ。なんか、自主トレとか食い物とかにもこだわってるとがって、前に誰が言ってたっけ）

「ハア……」

世良はため息をつく。パーカーを着こむ。靴はもちろん履けないから、ロッカーに突っ込んであった和菓子屋の紙袋に片方を放りこむ。

「……今度アドバイスとがしてもらお……つて、してくれるわけないが……堺さん、コワイもんなあ」

着替え終わって、再び堺のロッカーの前に立つ。

「せめて、御利益的ななんが分けてもらいてえなあ……」

この時の世良は多分ETUに入団してからの数年で一番落ち込んでいた。

だからだったのかも知れない。

「……御利益」

ふと、魔がさした。

世良は辺りをそぞくさと見まわす。当たり前だが他には誰もいない。

車を回してくる、と言ったスタッフはいつ頃戻ってくるだろうかと心臓がときどきする。

手を伸ばすと、簡単に堺の着ている服に手ががかる。

（なんが、すげえときどきすんな……）

ジャケットの袖を掴む。目の詰まったコットンジャケットの袖の感触は荒い。指で触れる

感触の硬さはまるで堺その人のようだと思えた。

（と、触ったくらいじゃ御利益ないよなあ……わがんだいけど、多分）

もう一度辺りを見回すと、思い切ってインナーに手を伸ばす。こちらはもう、直接堺の肌に触れている布だ。

こちらは手触りのいいコットンだった。（うわ……なんが、これ、うる……）

妙に胸がときどきする。堺の服を撫でながらうつつりしているなんて変態そのものだ。

なのに、まるで持ち主の肌を本人には内緒で触れているような背徳感が、世良をぞくりとさせる。

「……堺、さん」

小さく名前を呼びと余計に上がる。気付いたら、世良は堺のTシャツの袖を

持ちあげていた。

そうして、

そうして、そっと、堺のシャツの袖に唇を落とす。

まるで、騎士が姫に許しを得てするような慕いキスだ。

心臓ならときどきしている。自分が何をやっているのか自分でも言いわけが思いつかない。

（マジ、ヤバい……ときどきする……）

今ごろ負傷退場の世良の代わりにヒッチを走っている堺の顔が思い浮かんだ。

罪悪感は倍増した。

「世良？ 着替え終わったか？」

「……っす！」

突然破られた背徳の静寂に、世良はびっくりと反応した。

（ま、シてヤバかった……今の、ヤバかった）

若干敬遠気味だった先輩選手の服に、なぜ思わずそんなことをしていたのが。

世良が自覚できるようになるにはまだほんの少しだけ時間が必要だった。

◆◆PLANET ZERO EVENT INFORMATION◆◆ セラサク小説、大体大人向け。

2/6 浅草トライアンプ（申し込み済） 3/20 HARUコミックシティ（申し込み済）
5/4 SCC（申し込み済） 6/20 E T Uファン感謝デイ（申し込み済）
8/12 Comic Marcket80（申し込み予定）